

関連して、落語「死神」はこのオペラから作られたという一文が付け加えられている(この記述は、同書の初版本にはない)。音楽之友社の「名曲解説全集」にも載っていないオペラであるが、一体、どのような作品なのだろうか。

オペラ「クリスピーノと名づけ親」

(永竹)によると、オペラ「クリスピーノ」は、ピアヴェの台本により、一八五〇年に、リッチ兄弟によって作曲され、同年、ヴェネツィアで初演されたという(同書では、「クリスピーノと死神」というタイトルになっている)。今日では、あまり知られていない作品であるが、イタリアのボンジョバンニ・レーベルから台本英訳付きのCDが発売されている事がわかり、入手して、英訳台本を読んでみた。原題は「Crispino e la Comare」、直訳すれば、「クリスピーノと名づけ親」であり、英訳タイトルは「Crispino and the Fairy」となっているが、あらすじは次の通りである。

貧しさのあまり井戸に身を投げようとした靴直しのクリスピーノの前に、彼の「名づけ親」を名乗る女が現れ、病人の生死の見分け方を教えて、彼に、医者になるよう勧める。

女が病人の近くにいたら助からず、いなければ助かるというのだ。クリスピーノは、たちまち名医となるが、外では浪費し、家ではけちだと、妻を嘆かせる。そこで、「名づけ親」は、彼を、人の命の灯がランプにともる地下の場所に連れて行って、自分が死神である事を明かし、彼に死を宣告する。ところが、地上で倒れているクリスピーノを助けて欲しいと神に祈る妻子の姿を鏡の中に見せられた彼が、彼等のもとに帰って、良き夫、良き父になると死神に約束すると、彼の魂は、地上にもどり、地上で倒れていた彼は、息を吹き返し、喜ぶ妻に、これからは心を入れ替えると約束する(英訳台本では「名づけ親」(Comare)を「Fairy」(妖精)と訳しているが、この部分に関しては、原語を尊重してあらすじを書いた。(永竹)にあるあらすじ紹介では、タイトルをふくめて「名づけ親」の語が全くでてこないが、もしかすると、英訳文を使用しているのかもしれない。また、(永竹)の紹介では、クリスピーノが生き返るきっかけが、彼の遺産の妻たちへの譲渡の約束であるかのように書かれているが、それは間違いである)。

以上が、オペラ「クリスピーノ」のあらすじであるが、ゲリムや落語の山場となっていた「病人の上下の置き換え」が